

各関係機関長 様

熊本県病害虫防除所長

サカキブチヒメヨコバイの特徴と対策(技術情報第15号)について(送付)
このことについて、下記のとおり取りまとめましたので、業務の参考に御活用ください。
記

県内のサカキ栽培ほ場において、サカキブチヒメヨコバイによる被害が確認された。本虫は生息条件が良ければ発生が少なくても短期間で激しく加害するため、ほ場を観察し、発見した場合は間伐、整枝及び薬剤散布による防除に努める。

1 発生状況

令和6年(2024年)8月、県内のサカキ栽培ほ場でサカキブチヒメヨコバイによる被害が確認された。

本虫の発生は、和歌山県、高知県、佐賀県、宮崎県、鹿児島県、福岡県等で確認されている。県内では令和2年(2020年)に初めて発生が確認されており、散発的に発生していると考えられる。

2 形態及び生態、被害の特徴

(1) 形態

成虫の体長は4mm程度で、体色は茶褐色であるが雌成虫は雄と比べて体色が薄い(図1)。幼虫の体長は1~3mm程度である。

(2) 生態

和歌山県林業試験場の調査によると、幼虫期間は約3~4週間であり、越冬した個体が年間で約3~4回世代を繰り返すとされている。また、12月頃まで被害は拡大し、冬季(1~3月)には越冬のため活動を休止するが、3月以降に再び被害が拡大し始めるとされている。

生息密度は低く、単独で生息する。さらに、僅かな振動でもすぐに飛んで逃げることから発見しづらい。しかし、黄色に誘因されるため黄色粘着トラップで捕獲することができる。

(3) 被害

成幼虫ともに葉裏に生息し、葉を吸汁する。吸汁痕は白く変色し、葉表に白点が発生する(図2)。また、生息条件が良ければ1頭でも短期間で激しく葉を加害する。

新葉が柔らかい時期は、白点はほとんど見られないが、新葉が硬化する時期以降は白点被害が生じる。被害は低い位置の枝から発生し、上方の枝の葉へと拡大する。

3 防除対策等

地域や年によって発生消長が異なる点に留意し、以下の対策を実施する。

(1) 黄色粘着トラップ等を活用し、早期発見に努める。

(2) ヨコバイ類は暗く風通しの悪い環境で繁殖しやすいため、不用木の間伐や断幹、重なる枝葉や不用な枝を整理するための整枝等を行う。

(3) 薬剤防除は、幼虫期間に行うと効果が高い。黄色粘着トラップ等を活用して発生消長の把握に努める。幼虫期間は成虫の発生ピークの約3~4週間前である。

(4) 現在（令和6年11月19日時点）、サカキにおけるサカキブチヒメヨコバイを対象とする登録農薬は、ダイリーグ粒剤、スミチオン乳剤、アグロスリン乳剤の3剤である。

(5) 農薬の剤型によって殺虫効果が発現する時期は異なるため、幼虫期間に効果が発揮されるよう注意する。



雄 体長約4mm



雌 体長約4mm

図1 サカキブチヒメヨコバイ成虫



図2 サカキの被害葉

熊本県病虫害防除所

（熊本県農業研究センター 生産環境研究所内）

担当：守田、福岡

TEL 096-248-6490 FAX 096-248-6493